

第二章―塩田平に甦る教育の理想郷

第一節―学園のシンボル独立図書館

いっきに進められた設備、蔵書の改善

地域の文化の度合いをはかるとき、その周辺にある図書館が引き合いに出されることがある。大学でも同じことで、図書館がいかに充実しているか、どんな蔵書があるかが、その大学の教育水準をはかる目安になるのだ。

塩田平の一角に明るくその姿を誇る上田女子短期大学附属図書館は、幾多の変遷を経て充実、発展してきた。この附属図書館の歴史は、上田女子短期大学の歴史の象徴的存在でもある。

昭和四十八年に上田女子短期大学が誕生したころは、まだ図書館と呼ばれるほどのものではなかった。校舎内の一教室を図書館にあてた小さな規模のものだった。蔵書は一〇、六〇二冊、広さは閲覧室、書庫、事務室を合わせて一六三平方メートルで、木製の長机と長椅子、閲覧座席数は四〇だった。

上田女子短期大学としてスタートし、新しい陣容のもとで教育面での改革が着実に進んでいくにしたがって、設備や蔵書など、次から次へと改善の手が打たれていった。

改善の第一歩は、四十八年に木製の長机と椅子が、使いやすい機能的な閲覧机と椅子に取り替えられたことにはじまる。

五十二年の夏になると、大幅な拡張工事が行われた。図書館に隣接していたロッカールームを別棟に新築して、その空いたところに書庫を移転させ、参考図書以外の全蔵書を一室に集めた。いままで書庫が占めていた部分に事務室を移しカウンターを設けた。閲覧室が広く使えるようになった。この結果、延べ面積は三二三平方メートル、およそ二倍近く広くなった。閲覧座席数も四〇席から二倍の八〇席となった。入館者をカウントするセンサーも取り付けられ、この年から入館者は正確に記録されるようになった。

改修された図書館は、夏休みを終えて学園に戻ってきた学生に、大きなプレゼントとなった。

図書館運営予算も系統立てられ、蔵書数も急激に増加した。生まれ変わった図書館のなかで学生たちに注目されたのは、「児童書コーナー」の新設だった。分類は上田女子短期大学独自の分類方法で、これは分かりやすいと学生たちに歓迎された。参考図書、大型図書、郷土関係図書、新書などのコーナーができ、それぞれの図書も年々充実していった。

館長が常勤でないため、司書一人の手で行われていた運営の不足部分を補う目的で、四十九年に鈴木鳴海館長を委員長とする図書館運営委員会（通称図書委員会）が組織された。委員会は購入図書の選定のかたわら、図書館の幅広い利用を進めるため、『図書館だより』を創刊した。五十三年度から委員長に須永淑助教授があたり、国文科が開設された五十八年度から清水正男教授が館長と委員長を兼ね、平成四年度からは山口吉宗教授が引き継いで運営にあたっている。

突然の図書館建築指示下る

昭和五十四年の夏、校内は未曾有の工事現場と化した。夏休みを利用して全校舎内をスチーム暖房にしようと、大改修工事中だった。全職員総出で、てんてこ舞いをしていた。その工事が終わると間もなく九月初めのある日、突然、「図書館を建てる。地鎮祭は九月二十日に決定」と指示が下った。独立棟の図書館は早晚ほしいとは考えていたが、二年前の改装で閲覧室も倍増したばかり。職員にとって、これはまさに晴天の霹靂だった。

北野理事長が「図書館は大学の要だ」というその思想が、いま具現しようとしているのである。九月二十日、前庭で地鎮祭が執り行われた。図書委員会は準備委員会を開く暇もなかった。構想は理事会で決定された。北野理事長の英断、言動には慣れているはずの職員たちであったが、この

指示には大慌てであった。

北野理事長が描いた設計図は、従来の図書館のイメージからは考えられない、当時としては斬新な設計の超モダンな絨ガラス張り図書館だった。閲覧室は大型書架を中央にまとめ、その書架を囲むように閲覧机、キャレルデスクを周囲に配置した。

モダンな様式のなかにも木の温かさを生かした落ち着いた雰囲気のある閲覧室の図書館が出来上がった。着工からわずか三ヵ月というスピードで、十二月末に完成した。新図書館への引越は、正月休み中の一月五日から行われた。雪の舞う寒い日だった。土曜日・日曜日も返上しての整理作業が行われた。「この三月に卒業する学生に、新しい図書館をたとえ一日でもいいから利用できるようにしてあげたい」と工事を急いでもらったかいあって、五十五年一月二十四日、鉄骨二階建ての独立棟の附属図書館が開館した。

わずか三週間だけだったが、「卒業の記念によい思い出をプレゼントすることができました」と、須永淑委員長と長張和子司書は感慨深げであった。

ハイテク装備でも県下のリーダー格

五十七年、国文科開設準備にともなう約七千冊の専門図書が受け入れられ、蔵書数はいっきに約

二万七千冊となった。これによって、県内私立短期大学のなかで第一位を誇る規模の図書館となり、同時に利用者数も急増した。

設備面での充実ぶりにも目を見張るものがある。五十五年にはカードコピー専用機「ユービックス」を導入した。これは目録の作成を能率化するもので、国文科関係の図書受入れ準備業務で活躍した。

日常業務のなかで手がつけられていなかった部分の目録類の集中整備も成し遂げ、五十六年にはコピーサービスを開始した。さらに六十年、一階の書庫を移動集密書架に替えた。この蔵書容量は約三万冊。六十二年には視聴覚機器、カセット、ビデオ、スライド、CDなどの設備を整え、情報時代に即応した図書館として、いちだんと充実した。

次の図書館の構想は、時代の要求や情報システム化に向けてのコンピュータ化であった。コンピュータにあたっては昭和六十年ごろから予算を計上し、平成元年四月に機械化が実現した。システムの選定にあたっては、数多く開発されているシステムのなかから、経済性、操作性、設置形態などを十分考慮し、パソコンでの機械化を考え、ブレインティック社の「総合管理システム」を導入することにした。

二人の司書は平常業務と併行して蔵書のデータベースづくりに全力をあげ、翌二年九月、後期の

授業開始時には閲覧室の全図書二万六千冊の入力を終え、貸出・返却業務がスタートした。この貸出稼働は長野県内の全大学の中で初の稼働であった。当初計画よりも早めにスタートできたのは、図書館司書課程実習において、同課程の履修者による作業協力があつたことも大きな力となつた。

図書館の利用方法も大きく変わった。いままではカード記入方式による貸出手続きをしていたのを学生証をバーコード化し、スキヤナーで読み取るだけで処理完了となるため非常に効率化され、いつそう便利なものとなつた。また、国立国会図書館のマーク（J-BISC）などを取り込むことにより、新刊情報をいち早く入手することができるようになり、整理業務も非常にスピーディーなものとなった。

さらに外部データベースの取り込みを平成三年度から実現させた。まず、国文学研究資料館のデータを通信回線によりオンライン検索できるようにした。新聞記事情報も同時に取り込めるようにした。

そして平成四年度からは、全図書資料のコンピュータ貸出を可能とするためバージョンアップをはかり、平成五年度には学生用に検索端末を開放することが決定した。これは司書課程のコンピュータ実習や全学生の情報検索のために大いに期待される。

第二節「学海」の伝統を受け継ぐ国文科

国文科開設に寄せる地域の熱意

信越本線で上田まで行き、そこからさらに千曲川を渡って南に下ると、一つの盆地が広がる。塩田平だ。鎌倉時代「塩田は信州の学海なり」と呼ばれたところである。長野県教育の長い伝統と歴史は、じつに鎌倉時代から始まっているのだ。

「幼児教育科だけの単科大学では、発展には限界がある。女子総合大学になることを理想とし、新たな発展への第一歩として、学科を増設したいものだ」。こんな声が理事会の席上で聞かれるようになったのは、昭和五十年頃のことである。

日本の経済成長にともない、長野県の大学進学率は増加の傾向にあり、平均進学率は二八パーセントを超えていた。とくに進学志望がふえたのは女子だった。男子より高く三三・一パーセントに達していた。そして、人気が高い学科はやはり人文系。そのなかでもとくに文科系を希望する生徒

が大部分を占めていた。

一方、受け入れ側の短大の状況はというと、当時、国文科を開設している短期大学は長野県短期大学一校のみで、入学定員もわずかに四十人。国文科進学志望者は、「長野県内の短大に入りたいけど国文科がない。県外に行くしかない」と、東京はじめ県外へ出ざるをえない状況にあった。地元で国文科ができることは、長野県内の高校生、先生、そして進学させる親たちの願いでもあった。現に、上田市を中心とする近隣町村の教育関係者は、一日も早い国文科の開設を上田女子短期大学に望んでいた。学科増設への気運は高まっていた。

上田女子短期大学の理事会でもこうした要望を受けて、学科を増設しようと話が出たのである。当時、上田女子短期大学の教授陣は、幼児教育科の教員だけである。理事会の学科増設の意向を受けて開いた教授会では、満場一致で学科増設に賛成し、全面協力の体制をしいて、準備委員会を発足させた。

特命を受けて開設準備を進める

「国文科開設の準備を早く進めること」。この特命を北野理事長から受けたのは、昭和五十五年四月に理事会で常任理事・事務局長に任命された簾田保夫である。理事会で国文科増設が話題にのぼ

ってから五年近くの歳月が流れていた。開設目標は五十八年とすでに決まっていた。藤田新事務局長を囲んで、事務職員全員が開設準備にとりかかった。

「事務職員が一致協力して、国文科新設という大きな目標に向かって進みました。苦労は覚悟していましたが、大きな目標でしたから、達成されたときに得る大きな期待と希望をもつてがんばることができました」と、回顧する事務職員もいる。

開設準備を進めていくなかでまず問題になったのは、人事、カリキュラム作成、図書整備などだった。そこへ心強い協力者が現れた。広島大学の元事務局長の井上正氏と、浜松医科大学や産業医科大学などで事務職を経験した橋本春雄氏のお二人だ。早速、二人の指導と協力のもとで準備が進められた。じつは、この二人に嘱託職員になっていただくよう懇請したのは、ほかならぬ北野理事長だった。状況を心配した北野理事長が自ら国公立大学の事務職員にあたり、この二人に頼み込んだのである。

難問山積に全員一致協力

さらに難航したのは教授陣の問題だった。すぐれた教授をどれだけ招請できるかは、どの大学も永遠に追いつけなければならないテーマである。

カリキュラムが文部省の指導のもとで編成されると、それぞれの専門分野にたいし、候補となる教授のところへ折衝に行った。地元の信州大学、長野県短期大学をはじめとし、県内はもとより東京の大学まで足を運んだ。

結局、学科長に信州大学の塚田清策教授をはじめとして専任教授五名、専任助教授一名、専任講師二名、計八名の国文科の教員と一般教養科目で専任教授一名、教職課程に専任教授一名、専任助教授一名、計十一名の新任教員を招くことができた。この布陣は、学科新設に厳しい条件を示していた文部省からも、「十分必要を充たすもの」と評価されたほどの人選だった。

一方、国文科設置認可申請書の作成にも苦労した。大学・短期大学設置申請書は厳しい設置基準があるため、申請書作成には深い知識と独特の事務処理能力とが要求される。書類作成には全職員が一致協力して当たった。通常の業務のほかに、一字たりとも間違つてはならない膨大な資料を、連日、夜ふけまで作成に没頭した。

昭和五十六年五月六日。ようやく申請書を書き上げ、評議員会への諮問を経て、理事会で国文科設置を議決した。そしてその年の七月二十二日、時の文部大臣小川平二に申請したのである。

ところで、申請書を提出したからといって、すぐに認可が下りるとはかぎらない。認可されるためには、文部省から派遣される大学設置審議会および私立大学設置審議会委員の現地審査を受けな

ければならない。

独立図書館が開設に一役

「国文科の命は本だ」といわれる。国文科を新設するときの専門図書教の認可基準は四千冊以上だった。国文科の専門書だけでなく、一般教養図書もそろえなければならぬ。さいわい上田女子短期大学は、国文科新設に先立つ五十五年に独立棟の図書館をつくり、内容の充実に力を入れてきていた。この図書館が独立棟であったことが、文部省の審査クリヤーに大きく寄与していた。一方、教室数の充足度についても、従来、図書室として使っていたスペースがすべて教室に改装されたため、そのぶん教室が増えて解消されていた。図書を並べるスペースは十分にある。あとは購入する図書の選定である。図書の選定には非常勤講師の渡辺竹二郎長野県短期大学名誉教授を中心に、国文学・国語教育に造詣の深い先生方に依頼した。

書店から出版目録を取り寄せ、購入リスト作成のために、一冊一冊丹念に図書を選ぶ作業が続いた。そのとき購入した図書は七千冊。選定するのに要した時間は、丸三ヵ月である。発注五ヵ月後の八月末に図書は届いた。事務局員も総出で一冊ずつ本の整理に取り組んだ。図書と同時に和文タイプ三十六台と英文タイプ二十台をそれぞれ購入した。教室も整備され、あとは文部省の現地審査

を待つばかりであった。

感無量の大臣認可書

昭和五十七年十月十五日と同二十五日、文部省大学設置審議会および私立大学設置審議会委員総勢八人による現地審査が実施された。審査は一度でパスした。来学した審議会委員は、上田女子短期大学の施設をつぶさに視察して、地方短期大学とは思えない充実ぶりに加え、明るいガラス張りの真新しい独立棟の図書館に満足気な表情だった。

翌五十八年一月十七日、国文科設置認可が下りた。定員は八十人である。簾田元事務局長は、「文部大臣の認可書が到着したときは、本当に感無量だった」と、退職したいまでもそのときの感激が忘れられないという。

長野県の多くの人が渴望していた国文科は、こうして誕生した。地域の熱意と北野理事長の描く学園づくりの理想図と教職員の努力が、ここに実を結んだのである。初めての入学式は五十八年四月十一日。春の遅い塩田平に、ようやく春の息吹が感じられるところであった。

第三節―塩田平の国語国文学会

卒業研究と国語国文学会

昭和五十八年に国文科が発足するとともに、草創期にふさわしい教育計画や教育構想について、討議がもたれた。なかでも国文科の特色ある性格づくりに議論が集中した。既定の計画にもとづく前期の授業を終了し、幼児教育科と共同の菅平ゼミを終えると、国文科としての独自性を生かすさまざまな計画・方策が求められたのである。

そこで取り上げられたのが、共同研究ではなく個人研究による日本語と日本文学に関する卒業研究の実施である。上田女子短期大学の卒業研究は、全国の短期大学のなかでも珍しく、その成果についてはすでに幼児教育科で証明済みである。「二年間という短い短大生活だからこそ、大学で学んだ成果を一つの論文に仕上げる喜びを学生に与えてやってはどうか」というのが教授たちの考えであった。

優れた研究内容は広く公表へ

さて、卒業研究を実施すると同時に、その一環として「上田女子短期大学国語国文学会」が誕生したのである。国語国文学会は、教師と学生が一体となって構成し、国文科としての研究意欲を刺激して研究を充実させ、卒業研究から幾編かの優れた論文を外部に発表し、なおいつその教育と研究の充実を図ろうとするものである。

この発表の場として、総会や研究発表会以外に機関誌の発行が強く要望されたのである。五十九年五月にその準備は完成した。

機関誌の発行にあたって、二つの大きな目的が決められた。

①教授と学生が一体となつて学会を構成し、国語国文学に関する研究意欲を高め、お互いに切磋琢磨して研究を充実させる。

②卒業研究の中から幾編かの優れた論文を学外にも発表し、なおいつその教育と研究の充実をはかる。

会則をつくつていくにつれて、総会や研究発表会だけでなく、機関誌を発行して記録することにした。機関誌の名は『学海』と命名された。一年を待たずして「上田女子短期大学国語国文学会」の準備はほぼ終わった。

第一回の総会は昭和五十九年七月十二日に開催された。役員、年間行事予定などを審議し、承認された。役員には次の者があたることになった。会長に塚田清策教授、副会長に小松忠志教授、幹事に大島富朗助教授・天野文雄講師、監事に福沢武一教授、学生幹事は唐沢千代子、大野恵美子、原田薫、依田佐智江、出浦君子、高野敬依子、矢島園子、宮本裕子のみなさんである。

年間行事予定に①総会、②研究発表会、③読書会、④会誌の発行を決めた。

このあと福沢武一教授による講演「私の万葉―その発端と終末―」が行われた。

第二回総会は六十年七月四日。五十九年度の会計報告と活動報告、六十年度の活動予定報告のうち、この年四月から着任した西尾光一学長の講演「学問に志した頃」が行われた。

多彩な研究大会プログラム

第一回研究大会は六十年二月二十日、第一部が研究発表、第二部に卒業研究発表、第三部は茶話会の三部構成で行われた。

第一部は午前十一時、塚田教授の挨拶のあと、中山渡教授の講演「伊東静雄の評価をめぐる」にはじまり、第二部の五十九年度卒業研究佳作発表は、①柳沢隆子さんの「若き日の鏡王女―人と作品」、②伊沢恵里さんの「覚一本平家物語の忠度像」、③田中真紀さんの「宮沢賢治の童話文学」、

④唐沢千代子さんの「学校唱歌から童謡へ」、⑤中島秀子さんの「王維の自然観」など、きわめて完成度の高い研究発表であった。

また、第二回研究大会は六十一年二月二十日に開催され、講演は三田英彬教授の「文化原理と近代の文学―泉鏡花を軸にして―」。六十年度卒業研究佳作は次の五編だった。①林部さち江さんの『和泉式部日記』における―女―について、②北沢良子さんの「弁慶説話の成立と展開」、③水出一美さんの「天草本平家物語における表現と語法」、④大坂容子さんの「斜陽―その運命への素描」、⑤大口美穂さんの「森鷗外―『舞姫』と密かな反抗」

以後会長は六十三年度から中山渡教授、平成二年度から井出賢次教授に引き継がれている。

研究大会は一年生たちに知的刺激を与え、卒業研究のテーマを発見したり、研究方法への示唆を与えてくれる貴重な場になった。研究大会が終わったあとの一年生たちは、目立って顔つきが変わっていく。目つきが真剣になり、「卒業研究は何にしようか」と、考えはじめる。発表する先輩たちの姿を見ることが、大いに勉強になったのである。

上田ならではの『学海』発行

六十年三月三十一日には、研究大会の成果をまとめた待望の機関誌『学海』が創刊された。国文

科開設二年目にして、総会、研究大会、機関誌発行と、名実ともに上田女子短期大学国語国文学会が活動をはじめたのである。

『学海』は大学内だけではなく、教育実習でお世話になる中学校のほか、各高等学校にも配布された。内容は、総会と研究会の講演記録と卒業研究のなかから五、六人を選び、三十枚から四十枚の論文を二、三十枚に圧縮して掲載している。「二年間の研究ながら充実していて、感心した」という、うれしい評価が寄せられて教授たちを喜ばせているほか、「機関誌『学海』に掲載して、外部の評価を得ようという姿勢は素晴らしい」と、地元の教育界でも注目されている。

誌名『学海』の由来は、塚田清策教授が「創刊のことば」で語源について説かれている。

『学海』なる語は中国古典に見え、揚子の法言の学行篇に「百川学海而至于海」（百川海を学びて海に至る）とあって、川の水が流れてやまず海に入る。その海を学ぶ意から、学問にいそしむたとえに用いられている。またさらに引きのばして、学問の広大にして限りないことのとえにも用いられている」と。

大学・短大のかずある学会誌のなかで、この誌名は、けだし至言である。

第四節——三つの文学研修の旅

自然と歴史の宝庫、信州を教材に

塩田平は緑と自然の宝庫である。上田女子短期大学は、裏の山ではキジ、山鳩、郭公などの声が澄んだ空気のなかで響いているという環境のなかにある。

校歌の作詞の依頼を受けていた作詩家の吉川静夫氏が、校歌に「山鳩郭公」のフレーズを入れたのも、じつは、この豊かな自然に囲まれた環境から取り入れたものである。

その塩田の人たちが誇りに思っているものに、次の言葉がある。

「信州に却^{きよう}回して塩田に館^{やふた}す。乃^{すなわ}ち信州の学海なり」。これは、京都の南禅寺の開祖となった、信濃の生んだ名僧、無関普門の碑に刻んである句の一部である。

八百年以上前の鎌倉時代に残された言葉だが、この土地の人々の学問に対する理解と関心、そして塩田平にたいする誇りを示す言葉である。鎌倉は、新田義貞によって攻められて文化財ともども

ほとんど燃えてしまい、かえって塩田平のほうは戦火にも遭わず、鎌倉時代の文化遺産は鎌倉よりも多く残っているという。塩田平に「信州の鎌倉」というキャッチフレーズがついたのも、こうしたことが起源となっている。

無関普門が学んだのも、塩田平の南西に位置する別所にある寺だったといわれている。常楽、安楽、長楽のいわゆる別所三楽寺、中禅寺、前山寺などである。当時は、全国から若い僧たちが、学問や宗教を学びにこの塩田に来ていたのである。

塩田平は、文化遺産を守るといふ地域の人びとの気持ちとともに、このような「塩田は信州の学海なり」といわれた土壌、学問を大事にする雰囲気があつて、学問に対する真摯な環境をつくり出しているといえるが、古代の文献にも、塩田平と関連のある興味深い史料がたくさんある。

たとえば『万葉集』には、防人の歌にある小県の国造他田舎人^{オサダノトネリ}大島が詠んだ歌をはじめ、東歌にも、塩田平に生まれた人の歌が豊富にある。

また、平安時代初期の仏教説話『日本霊異記』のなかに、上田女子短期大学近辺の話が二つ収録されている。地方の話は珍しいといわれている『日本霊異記』の研究材料が、キャンパスのすぐ近くから生まれているのだ。

貴重な文献も塩田平に保存されている。その代表的なものが、上田女子短期大学から南へ歩いて

七、八分の生島足島神社にある武田信玄の家臣団が書いた「起請文」である。これは国の重要文化財に指定されている。

起請文とは、神仏に誓って約束する文書のことである。武田信玄が地方の家臣たちに、自分に忠誠を誓わせるために書かせた八十三通の古文書のこと、それがそっくり残っているのだ。

一、信玄様に対し、どんなことがあっても忠誠を尽くすこと。

もしこの誓いにそむいたら、梵天・帝釈天ほかあらゆる神仏からどんな罪でも甘んじてうける。などと「熊野^{くまの}牛王紙^{ごおうし}」という朱印や梵天の模様のある特殊な用紙に書かれている。もちろん、血判が押してある。

自然環境にめぐまれ、「学海」の伝統を受け継ぎながら国文学を学ぶものにとって、信州は研究材料に事欠かない。

木曾ゼミ

国文科には三つの大きな行事がある。木曾ゼミと文学散歩、そして文学研修旅行である。たとえば「木曾ゼミ」

上田女子短期大学の母なる川、千曲川。多くのひとが、千曲川といえば島崎藤村の名を思い浮か

べるに違いない。その藤村ゆかりの地、木曾路を訪ねて、国文科の一年生全員が七月に一泊旅行する。「木曾ゼミ」と呼ばれる夏期ゼミナールである。

国文科開設初年度の昭和五十八年は、幼児教育科と共通のスケジュールで菅平で行われたが、五十九年からは国文科にふさわしく、藤村を訪ねて木曾路を歩く一泊二日のゼミにしたのである。

馬籠の宿、藤村記念館、奥谷郷土館などの見学と読書会が日程の中心だが、とりわけ一日目の夕食のあとの七時から九時ごろまで二時間にわたって行われる読書会は、大いに勉強になる場である。十数人のグループをいくつかつくり、それぞれ藤村の作品のなかから文庫本を一冊選び、あらかじめ読んでくる。『春』『家』『桜の実の熟する時』『夜明け前』など、グループごとに作品は異なる。読書会の会場となるのは、学生たちの泊まる部屋である。部屋をきれいに片付けて、みんなで車座になる。真剣に、またときには笑いもおこる、といった調子で読書会は進んでいく。そして、木曾の夜はふけていくのだ。

学生たちは、木曾ゼミの読書会をするなかで、自分たちの身近なところに、こんなにも素晴らしき作家がいたという事実にあらためて敬意をはらうようになる。

「藤村は、どうもとつきにくい」と思っていたけど、しっかりと読んでみて素晴らしさを認識しなおしました。本曾ゼミがなかったら、藤村をこんなにじっくり深く読むチャンスは、絶対になかつ

た。はじめは、強制的に読まされているようでいやだったけど、いまはとてもよかったなと思っています」。これは、木曾ゼミから帰ってきた、ある学生の素直な感想文である。

文学散歩

上田女子短期大学に学ぶ学生たちは、散歩感覚で文学とのさまざまな出会いを堪能することができるのである。すなわち、文学散歩。こんな贅沢な響きをもつ言葉がそのまま生きているのも、この大学ならではである。

「せっかく文学の宝庫の中にいるんだから、机の上の一方的なレクチャーだけではなく、足でいろいろな文学碑を見て回ったほうが、現実に身につくであろう」。国文科の草創期の教授たちの発案で、国文科の行事として県下に広がる文学遺跡を訪ねる「文学散歩」が生まれた。

昭和五十八年五月二十七日。第一回の文学散歩が行われた。

この日、午前八時三〇分上田駅を出発した。まず小諸の懐古園に行き、藤村記念館、句碑、火山博物館を見学の後、軽井沢に回り、若山牧水、堀辰雄、有島武郎、松尾芭蕉、室生犀星、正宗白鳥の文学碑を見て回った。以後各地を回ったが、文学散歩のこのような型が定着した。

信州再発見の旅

緑の萌える五月の文学散歩には、国文科の学生全員と教員が一緒にバスに乗り込む。日帰りのバス旅行だ。入学したてで緊張した面持ちの一年生と、二年目の文学散歩に前年以上の出会いを期待する二年生。落葉松の林がもつとも美しい初夏の一日、自然に意思の疎通や親睦がはかれる。

コースは教員たちが決める。二年続けていく学生たちのため、コース設定には毎年かなり工夫をこらしている。地元に住んでいても、その価値を見過ごしてしまふような場所を探し求めて、毎年、新しいコースを開拓していくのだ。コースが設定されると、必ず事前に一年、二年の担任四人がコースを巡ってみる。雨が降ったら昼食はどこで食べようか。徒歩で移動しても大丈夫だろうか、心配するのは、つねに学生たちのことばかりだ。だが不思議なことに、これまで文学散歩の日に雨が降ったことは一度もない。

いままで選んだコースのなかで、学生たちをいちばん驚かせたのは、六十三年に行つた安曇野の浅原六朗記念館である。総勢二百数十人で行つたのだが、一度でも来たことがあるという学生はほんのひと握り。記念館があることすら知らなかったという学生がほとんどだった。浅原六朗記念館は通称「てるてる坊主の館」。てるてる坊主の作詞者の記念館だ。

「てるてる坊主の館にはびっくりしました。歌はよく知っているつもりでしたが、その作詞者が私

たちの県出身で、あんなに立派な記念館があるなんて、まったく知りませんでした」

「安曇野にあるのは、礫山館、道祖神、ワサビだけかと思っていましたけど、浅原六朗記念館はまったく知りませんでした」。安曇野出身の学生ですら、こんな感想を語る。

「その気になりさえすれば、いくらでも勉強できる。私たちはもつと郷土のことに関心をもたなければ……」というのが、すべての学生の印象である。

西尾学長も、郷土についてこう語っている。

「長野県は文学研究の理想郷ですね。ここでは、それこそ路地の石までも見る者に何かを教えてくれるような気がします」と。

学生たちがつくるガイドブック

木曾ゼミ、文学散歩、文学研修旅行には、学生たちがつくるガイドブックが使用される。クラスで作成委員を選び、資料を集め、自分たちで原稿を書く。作業の分量は多いが、どちらもほぼ一週間ほどで仕上げてしまう。

木曾ゼミのガイドブックをつくるのは、一年生である。ページ数は三、四十ページ。藤村の作品の簡単な紹介や木曾路の観光案内風のページなどがある。集めてきたパンフレット類を切り抜いて

糊ではったり、イラストを添えたり、楽しみながらの手づくり。本文も手書きで、印刷も学生たちだ。

文学散歩は、教員が設定したコースをもとに二年生が担当する。約二十ページほどだが、コース案内あり関係資料ありで、年を追うごとに完成度は高くなっていく。「はじめのうちはイヤだと思っていたけれど、実際つくってみると、予備知識が豊富になって、何だか得をしたような気持ちになりましたね」とは、初めてこのような仕事を経験したという学生の感想だ。というのも、行く直前に配られて読むより、豊富な資料を選択しながらつくりあげるだけに、その予備知識はだれよりも深いからだ。

学生たちは手づくりのガイドブックを片手に木曾路をまわり、文学遺跡を訪ね歩く。国文科の学生とはいえ、日頃、郷土の文学遺跡や文学碑を注意深く見る機会は多くはない。学生たちにとって文学散歩は、郷土を再発見するまたとないチャンスになっているのである。「教科書でしか知らなかった伊藤左千夫や斎藤茂吉の歌碑が長野県にあることを初めて知りました」と、学生たちは感激した面持ちで話す。

一方教授も、「学生たちがこんな環境のなかで勉強できるのは、本当に幸せだと思います。でも放っておくと気がつかないことが多い。学生に強引だと思われようが、連れていくだけの価値はあ

る」と語る。

文学研修は古都めぐり

「国文科ができて一年目、二年目の学生に、なんとなく寂しい思いをさせてしまった」

教授たちは、新設して二年目までの学生たちを旅行に連れて行つてあげられなかったことを、とても残念がっている。文学研修旅行が初めて行われたのは、三年目の昭和六十年のことだ。国文科の一年生が毎年十一月に、吉野、飛鳥、奈良、京都方面を巡り、日本の古典から近代文学までの関わりのある史蹟・建物・神社・仏閣・芸術作品などを訪ねて晩秋の古都を巡る、三泊四日の旅である。「上古から近代まで、どの時代に関心をもっている学生も満足できるように、時代にこだわらず、あらゆる文学遺跡を見て、肌で感じてこよう」。これが文学研修旅行の目的である。高校生が修学旅行で行くような、京都、奈良巡りとは一味違う。ワンランク上の古都を楽しむコースを設定している。

六十年は学生がまだ少なく、参加者は学生が約五十人と担当教員二人であった。バス一台で朝七時前に出発した。バスは三重県を通り、八時間ほどで奈良に着く。室生寺、長谷寺を回り、その日は吉野泊まり。二日目は斑鳩の里から飛鳥を一巡りして午後は自由行動。その日は奈良に泊まる。

三日目は浄瑠璃寺から大津の三井寺を見て、紫式部が『源氏物語』を書いたといわれる石山寺を訪れ、比叡山を経由して京都に泊まる。最終日は自由行動。そして夕方、帰路につく。

コース選びにアイデア満載

文学研修旅行は、年々質的に向上している。二年目の六十一年は、一年目の反省から、長谷寺参拝を二日目にして、初日のスケジュールをゆるやかにした。四年目の六十三年には学校行事としてすつかり定着した。参加した学生は百十五人と二倍以上になって、バスも三台連ねた。

学生たちも先輩たちの残した記録を見て、綿密な自由行動の計画が立てられるようになった。それまで全行程がバス移動だったが、京都までの往き帰りだけをバスにして、京都、奈良での移動は全部電車や路線バスに切り替えた。奈良から京都へ移動するときは、学生たちの大きいバッグだけトラックで運ぶといった教授たちのアイデアで、学生たちは、より身軽に自由に、何でも見て歩けるようになり、大喜びであった。

普通の旅行では行けないようなところを自由に丹念に見て回り、肌で触れてくるのが文学研修旅行のテーマである。そのテーマにもっともふさわしいコースが、自由行動である。学生たちにとっても、いちばん待ち遠しい一日である。

文学研修旅行の直前ともなると、学生たちがもちかけてくる自由行動のコースの相談で教授たちはたいへんだ。奈良、京都それぞれに自由行動の時間があるが、教授と学生が一緒に行動することもある。この文学研修旅行の発足当時から、三田英彬教授、天野文雄助教授とともに推進力になってきたのは、京都の大学を卒業した塩入秀敏助教授。観光コース、修学旅行コースからはずれた東大寺から西に歩く佐保路や東山山麓の山道をガイドして、学生と一緒に足が痛くなるまで歩いたこともあるという。

自由行動のコースは、自分たちが行きたいところを最優先するだけに、スケジュールを事前に相談された教員が、びつくりしてしまうほどスケールの大きい計画もある。

また、「万葉の夢とロマンを体験したい」と、突飛な計画を相談されたこともあった。

うつそみの人なるわれやあすよりは

二上山をいろせとわがみむ

〔万葉集〕二卷一六五 大伯皇女

処刑された大津皇子が二上山に葬られるとき、姉の大伯皇女が弟を偲んで詠んだ歌である。その歌に感動した学生が、「大津皇子と姉の大伯皇女を偲びに当麻の二上山のふもとまで行き、二上山に登りたい」と、二上山登山計画を立て、ある教員のところへ相談に行った。教員は学生に「それ

は、ちょっと無理かもしれないから、下からながめて、『二上山を弟世とわがみむ』と口ずさんでみたら」と、なだめたという。

文学研修旅行でもガイドブックを準備するのだが、こちらは参加する一年生全員が一ページずつ書いてきた手書きの原稿を、そのまま印刷し一冊にまとめる。どんなところを中心に見聞したいかを書く学生、京都の年中行事、名所旧跡を丹念にレポートする学生もいる。なかには、「おみやげ案内」を事細かに書いてくる学生もいるが、教員たちはその学生をとがめるようなことはしない。自由がいちばんなのである。

原稿の分量も年ごとに増え、初めは五十ページ程度だったものが、六十三年には百三、四ページにもなっている。ページが多くなると、文学研修旅行への学生たちの期待もふくらむというのである。

晩秋の古都でロマンを求め、学友と朝まで語り明かす文学研修旅行。国文科の卒業生たちの思い出の宝石箱のなかで、ひととき輝く宝石の一つであるに違いない。